

[25-01] 梵天勸請——説法を決心する

悟った法は深甚難解で、人々に判ってもらえるかどうかと逡巡する釈尊に、梵天が説いてくれるように頼み、説法を決意する。

[A] 原始聖典

- ①MN.026 ‘Ariyapariyesana-s.’ (vol. I p.168) ; 説法を躊躇していた私に、梵天は「善逝よ、法を説いて下さい。汚れ少なき有情があっても、法を説かれないと衰退します。法を説いていただければ法を知る者となるでしょう」と言った。
- ①SN.06-001 (vol. I p.136) ; 世尊が初めて正覚された時のこと。世尊は躊躇されて法を説くことに心が傾かなかった。そこで娑婆世界の主ブラフマンは世尊の前に現れた。
- ① ‘Buddhavaṃsa’ 26-02 (p.097) ; 梵天の勸請によって法輪を転じた (Brahmunā yācito santo dhammacakkaṃ pavattayim) 。
- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.004) ; 世尊はアラーヤを楽しむ衆生 (ālayarāmā pajā ālayaratā ālayasammuditā) には、縁起の理法を説いても分らない、それは疲労をもたらすだけと考えられた。そこで梵天 (Brahmā sahampati) が説法されることを説得した。
- ⑥増一阿含19-01 (大正02 p.593上) ; 一時仏在摩竭国道場樹下。爾時世尊得道未久。便生是念。我今甚深之法難曉難了。……爾時梵天在梵天上、遙知如来所念……。
- ⑦四分律「受戒捷度」 (大正22 p.786下) ; 爾時世尊作是思惟已、默然而不説法。時梵天王於梵天上、遙知如来心中所念已、念世間大敗壞。如来今日獲此妙法、云何默然而住、令世間不聞耶…。
- ⑧五分律「受戒法」 (大正22 p.103下) ; 仏食已前到樹下三昧七日。過七日已從三昧起。作是念。我所得法甚深微妙難解難見寂寞無為、智者所知非愚所及。衆生樂著三界窟宅集此諸業、何縁能悟十二因縁甚深微妙難見之法。又復息一切行截断諸流、尽恩愛源無余泥洹、益復甚難。若我説者徒自疲勞唐自枯苦……。時梵天王……。
- ⑩根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」 (大正23 p.717上) ; 受梵王請往婆羅痾斯、三轉十二行法輪……。
- ⑩根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」 (大正23 p.948中) ; 受梵王請往婆羅痾斯。
- ⑩根本有部律「出家事」 (大正23 p.1027上) ; 便證無上正等菩提、時有梵天、來請世尊。
- ⑩根本有部律「破僧事」 (大正24 p.126中) ; 爾時世尊如上思惟、止心住已不念説法。時娑婆世界主梵天王、知仏心念即自思惟……。
- ⑩根本有部律「雜事」 (大正24 p.299下) ; 受梵天請往婆羅痾斯三轉十二行法輪。
- ⑩根本有部律「雜事」 (大正24 p.395中) ; 梵王來請詣婆羅痾斯。
- *①DN.014 ‘Mahāpadāna-s.’ (大本經 vol. II p.035) ; 縁起法の深甚なることを考えて説法を躊躇されていたビパッシン仏を梵天が勸請した。
- *①SN.06-002 (vol. I p.138) ; 世尊が初めて正覚されて、ウルヴェーラーの尼連禪河のアジャパーラニグローダ樹の下に住されていたときのこと、梵天と尊敬することがないのは苦しみである、という問答をした。
- *①SN.47-018 (vol. V p.167) ; 世尊が初めて正等覚して、ウルヴェーラーの尼連禪河の岸辺のアジャパーラニグローダ樹の根方に住していたとき、梵天と一乗道 (ekāyana magga) とは四念処 (cat-tāro satipaṭṭhāna) であるという問答をした。
- *①SN.47-043 (vol. V p.185) ; 同上
- *①SN.48-057 (vol. V p.232) ; 世尊が初めて正等覚して、ウルヴェーラーの尼連禪河の岸辺のアジ

- ャパーラニグローダ樹の根方に住していたとき、梵天と五根を修習すると不死に至る (Pañcindriyāni bhāvītāni bahulikātāni amatogadhāni honti amataparāyanāni amatapariyosānāni) と問答した。
- *①AN.04-021 (vol. II p.020) ; 世尊は初めて正覚されて尼連禪河のアジャパーラニグローダ樹の根方に住されていた。そのとき世尊に不恭敬は苦である……という思いが生じた。娑婆世界の主ブラフマンは世尊の思いを知って世尊の前に現れた。
 - *②長阿含001「大本経」(大正01 p.008中) ; (毘婆尸仏) 我今已得此無上法、甚深微妙難解難見……時梵天王知毘婆尸如来所念……。
 - *③中阿含204「羅摩経」(大正01 p.777上) ; 我初覚無上正尽覚已便作是念。我当為誰先説法耶。
 - *④雑阿含1188 (大正02 p.321下) ; SN.06-002に同じ
 - *④雑阿含1189 (大正02 p.322上) ; SN.47-018に同じ
 - *④雑阿含1190 (大正02 p.322下) ; 世尊は鬱毘羅聚落尼連禪河側菩提樹下、成仏未久のころ、梵天とクシャトリヤの両足尊がもっとも勝れているという問答をした。
 - *⑤別訳雑阿含101 (大正02 p.410上) ; SN.06-002に同じ
 - *⑤別訳雑阿含102 (大正02 p.410中) ; SN.47-018に同じ
 - *⑤別訳雑阿含103 (大正02 p.410下) ; 雑阿含1190に同じ
 - *⑥増一阿含24-05 (大正02 p.618上) ; 爾時世尊便作是念。我今以此甚深之法、難解難了難曉難知、極微極妙智所覚智。我今当先與誰説法。使解吾法者是誰。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.081, 南伝28 p.171) ; 正等覚者は、その後またアジャパーラ榕樹 (Ajapālanigrodha) の所に赴いて、榕樹の下に坐し給うた。……他人のために法を説き給うのをしたくないような心持になり給うた。すると娑婆世界の主大梵王は……帝釈、善侍、……他化自在及び大梵天を引き伴れて仏の所へ行き、……仏に説法を願った。
- ③中本 (大正04 p.147下) ; 世尊念曰。吾本発心、誓為群生梵釈請法、甘露当開。
- ④瑞応 (大正03 p.479下) ; 仏以神足、移坐石室。……設当為説、天下皆苦、空無所有、誰能信者、……意欲默然、不為世間説法。……梵天知仏欲取泥洹、……梵天白仏言。……欲聞仏法、当為世間説経、願莫般泥洹。
- ⑤異出 (大正03 p.620中) ; 仏神通洞達。諸天集会、皆稽首前謁、仏閑居実処、精念天下衆善悼哀萬民。
- ⑥普曜 (大正03 p.528中) ; 世尊默然不肯説法。梵天心念、今我寧可往詣仏所請如来轉正法輪。
- ⑦方広 (大正03 p.602下) ; 如来初成正覚、住多演林中独坐一処。……爾時娑婆世界主螺髻梵王……惟願世尊轉于法輪、……往詣仏所。……釈提桓因、四天王天、三十三天。
- ⑧LV. (Lef. p.392, 溝口 p.345) ; 如来が完全にして成就されたブツダの状態に達せられた最初の時期において、ターラーヤナ (Tārāyaṇa) 樹の根元に留まっておられた間……馬の「たてがみ」を持つ大梵天王が、ブツダの神通力そのものによって如来の心の躊躇を知り……どうか世尊、法をお教え下さい。……帝釈天、……四天王衆天の神々、三十三天の神々……かの如来のおられる場所に近づき……。
- ⑩仏讚 (大正04 p.028中) ; 仏於彼七日 禅思心清浄 觀察菩提樹 …… 安住於默然 顧惟本誓願 復生説法心 …… 梵天知其念 法応請而転 …… 合掌勸請言
- ⑫BC. (14-98) ; ……天界に住む二人の首長〔最高神ブラフマンとインドラ神 (帝釈天)〕は、静寂のために教えを説こうと決意された善く逝ける人 (ブツダ) の心を知って、……〔ブツダのところへ〕近づいてきた。……牟尼よ、生存の大海を自ら渡りおわれたからには、苦悩に沈ん

でいる群生を濟い上げられよ。

- ⑬行經（大正04 p.087上）；願成懷歡喜 悅澤樹王下 坐觀樹七日 …… 法微妙難解 …… 意欲默然寂 最神妙梵天 …… 願憶果敢誓 施甘露於世
- ⑭過去（大正03 p.642下）；爾時如來、於七日中、一心思惟、觀於樹王。……我寧默然、入般涅槃。……大梵天王、……以大悲力、轉妙法輪。積提桓因、乃至他化自在天、亦復如是、勸請如來、……乃至三請。爾時如來、至滿七日、默然受之。
- ⑮集經（大正03 p.805下）；爾時世尊、作如是念。……但衆生輩、着阿羅耶(隋言所着処)。……爾時娑婆世界之主、大梵天王、……慈悲說法。……以仏眼觀……已見諸衆生、……利根……鈍根……優鉢羅、……分陀利等、……我今欲開甘露門。
- ⑯MV. (vol. III p.313 Jones III p.302)；世尊はアジャパーラ・ニヤグローダ樹に向われ、樹下に止って世間を熟考された。「自分の悟った法は甚深難解で理解しがたい。……山に入って沈黙して住することにしよう」その時大梵天は帝釈天の所へ行き、世尊に転法輪をお願いしようと言う。彼等はその他の諸天、夜叉と仏所へ詣り、……大梵天の要請を許される。……「我、不死の門を開いたり」
- ⑰衆許（大正03 p.952下）；是時娑婆世界主大梵天王、知於世尊不云說法亦不生心、……至仏所……。…… 悉開甘露門 演法濟衆生 ……利根鈍根……青蓮花或白蓮花等……我今降法甘露雨 当潤衆聞及一切。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.036中）；爾時如來於七日中一心思惟觀於樹王而自念言。（出因果經）
- ②氏譜（大正50 p.092上）；經云。時大梵王見成聖果、默然而住心懷憂惱。……今當往請轉大法輪、……如是者三。至滿七日、默然受已……。
- ③統紀（大正49 p.152中）；二月九日、如來於七日中一心思惟觀於樹王、而自念言。……我寧般涅槃。
- ④JM. (p.029, 畑中 p.119)；梵天に乞われた太子は法輪を轉じた。
- ⑤Bigandet. (vol. I p.111, 赤沼 p.147)；「私の今有する法の智慧、四真諦智慧は甚だ得難いものである。……」かくの如く思い来つて仏陀は大法宣伝の不行を企てんことを思い止まり給うた。その時大梵天王は仏陀の心中を推知して、……仏陀のみ許に赴いた。……梵天の勸請をきいて、仏陀は一切有情に対して、同情の念を起し、……大法を宣伝すべきことを厳に約束し給うた。

【25-02】梵天勸請——アーラーラ・カーラーマと

ウッタカ・ラーマプッタの死を知る

最初にアーラーラ・カーラーマ (Ālāra Kālāma) とウッタカ・ラーマプッタ (Uddaka Rāmaputta) に説法しようとするが、彼らがすでに死んでいることを知る。そこで共に修行した5人の比丘に説法することとする。

[A] 原始聖典

- ①MN.026 ‘Ariyapariyesana-s.’ (vol. I p.169)；最初に説法すべきものとしてアーラーラ・カーラーマ (Ālāra Kālāma) を思いつかれたが、彼は死んで7日であった (sattāhakālakata)。……ウッタカ・ラーマプッタ (Uddaka Rāmaputta) は昨夜死んでいた (abhidosakālakato)。
- ①Vinaya ‘Mahākhanda’ (vol. I p.007)；説法を決心された世尊は、まずアーラーラ・カー

- ラーマに説法しようと言われたが、彼は死んで7日であった (sattāhakālaṃkata)。そこでウッタカ・ラーマプッタに説法しようと言われたが、彼は昨夜亡くなっていた (abhidosakālaṃkato)。
- ③中阿含204「羅摩經」(大正01 p.777上)；我当為誰先説法耶。我復作是念、我今寧可為阿羅羅加摩先説法耶。爾時有天住虚空中而語我曰。大仙人当知、阿羅羅加摩彼命終来至今七日……。鬱陀羅羅摩子、命終已来二七日也。
- ⑥増一阿含24-05(大正02 p.618上)；一時仏在摩竭国道場樹下、初始得仏。爾時世尊便作是念、我今以得此甚深之法、難解難了難曉難知、極微極妙智所覺知。我今当先與誰説法。使解吾法者是誰。爾時世尊便作是念。羅勒迦藍諸根純熟、応先得度。又且待我有法。作此念已、虚空中有天白世尊曰、羅勒迦藍死已七日……。今鬱頭藍弗先応得度。当與説之。聞吾法已、先得解脱。世尊作是念、虚空中有天語言、昨夜夜半以取命終……。
- ⑦四分律「受戒毘度」(大正22 p.787中)；爾時世尊復作是念。我今当先與誰説法。聞便即解、即念阿蘭迦蘭垢薄利根聰明有智。我今寧可先與説法。念已復更智生、今阿蘭迦蘭命終已経七日……。鬱頭藍子垢薄、利根聰明有智。我今寧可先與説法。作是念已、復更智生、鬱頭藍子昨日命終……。
- ⑧五分律「受戒法」(大正22 p.104上)；仏作是念。甘露当開誰応先聞。鬱頭藍弗聰明易悟、此人応先。念已欲行、天於空中白言。鬱頭藍弗亡来七日。仏言。苦哉彼為長衰。甘露法鼓如何不聞。復更惟曰。甘露当開誰応次聞。阿蘭迦蘭聰明易悟。次応得聞、適起欲行。天復白言。阿蘭迦蘭昨夜命終。
- ⑩根本有部律「破僧事」(大正24 p.126下)；時仏世尊復作是念、我於今者為誰先説。……其哥羅哥命終已来経今七日。……此嚧達羅摩子昨夜命過。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.081, 南伝28 p.172)；仏はこれに承諾を与え、「我は先ず最初に誰に法を説いたらよかろう」と考え、……阿羅邏・迦蘭 (Ājāra アーラーラカーラーマ) ……死んでから已に七日 (tassa sattāhakālakatabhāvaṃ) ……優陀羅羅摩子 (Uddaka ウッタカラーマプッタ) ……前夜死んで了ったことを (tassāpi abhidosakālakatabhāvaṃ) 知って……。
- ③中本(大正04 p.147下)；昔吾出家、路由梵志阿蘭迦蘭、待吾有禮二人応先。……彼二人者、亡来七日。……鬱頭藍弗、……此人者、昨暮命終。
- ⑥普曜(大正03 p.528下)；以仏道眼普觀世間、今当為誰第一説法。……仏即念知鬱曇藍弗三垢麁。……物故已来已復七日、第二学仙今日寿終。
- ⑦方広(大正03 p.605中)；五眼清浄觀察世間、作是思惟、誰応最初堪受我法。……彼外道羅摩之子……其命終已経七日。……彼外道阿羅邏仙人……其命終已経三日。
- ⑧LV. (Lef. p.403, 溝口 p.355)；五つの眼を身にそなえ、何物も覆い曇らすことのできないブツダの觀察力をもって世間全体を考察して、……誰の為に、先ず最初に、私はこの法を教えることができようか？……ルドラカ・ラーマプトラ (Rudraka Rāmaputra) ……七日前 (sapatāhakālagata) に死んだ……アーラーダ・カーラーパ (Ārāḍa Kālāpa) ……三日前 (triṇy ahāni kālagata) に死んだということを知られた。
- ⑩仏讃(大正04 p.028下)；食已顧思惟 誰応先聞法 唯有阿羅藍 鬱頭羅摩子 彼堪受正法 而今已命終
- ⑫BC. (14-106)；アラーダとウドラカとのこの二人は、〔ブツダの〕教えを理解しうる知恵をもっている、と牟尼は見そなわした。しかし、その二人はすでに天に逝った、と心でごらんになって、〔ブツダの〕心は五人の比丘に向けられた。
- ⑬行経(大正04 p.087下)；応得度者 阿蘭命過 已至七日 見鬱陀羅 昨夜命終

- ⑭過去（大正03 p.643上）；爾時世尊、受梵王等請已、……満二七日。爾時世尊、又復思惟、……誰応在先、而得聞者、阿羅邏仙人。……阿羅邏仙人昨夜命終。……迦蘭仙人昨夜命終。
- ⑮集經（大正03 p.807上）；爾時世尊、作如是念。我今於先初說法處。……優陀羅迦羅摩子、……命終來、已經七日……生於非非想天。……阿羅邏迦羅摩種、……昨日命終……知阿羅邏此處命終、生不用處。
- ⑯MV. (vol. III p.322 Jones III p.312)；その時世尊は考えられた。「最初にこの法を説いた時、誰が理解出来るだろうか」……ウドラカ・ラーマプトラ (Udraka Rāmaputra) ……彼は七日前に (satāhaṃ kālagato) 亡くなった……アーラーダ・カーラーマ (Ārāḍa Kālāpa) ……彼は三日前に (tryahaṃ kālagato) 亡くなった。
- ⑰衆許（大正03 p.953上）；爾時世尊即自思惟、今者何人先得聞法。……阿囉拏迦羅摩等仙人……皆已命終方今七日。……嚕捺囉迦羅摩子亦趣無常。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.037下）；爾時世尊受梵王等請已。（出因果經）
- ②氏譜（大正50 p.092上）；經云。……即以道眼、念彼二仙並已壽終。
- ③統紀（大正49 p.152中）；二七日。以仏眼觀諸衆生上中下根及諸煩惱。三七日思惟、……誰先得聞。阿羅邏……昨日命終、……迦蘭……昨夜命終。
- ④Bigandet. (vol. I p.113, 赤沼 p.149)；仏陀は次に考え給うよう。「私は先づ誰に向つて仏法を宣伝したらよかろうか」……阿羅邏仙……七日以前に逝く……鬱陀羅仙……昨日中夜命終。

【26】ウパカに遇う

バーラーナシー (Bārāṇasī) に行く途中で、アージーヴィカ教徒 (ājīvika) のウパカ (Upaka) と遇う。釈尊は成仏したことを宣言するが、ウパカはそのまま行ってしまう。

[A] 原始聖典

- ①MN.026 'Ariyapariyesana-s.' (vol. I p.170)；邪命外道のUpakaはガヤーと菩提樹の中間の道を行く私を見た。……
- ①Vinaya 'Mahākhandhaka' (vol. I p.008)；世尊はバーラーナシーに行く途中のガヤーと菩提樹の間で (antarā ca Gayāṃ antarā ca bodhiṃ addhānamaggapaṭipannaṃ) 邪命外道のウパカ (Upaka ājīvika) に会った。
- ③中阿含204「羅摩經」（大正01 p.777中）；撰衣持鉢往波羅捺加尸都邑。爾時異学優陀遙見我来、而語我曰……。
- ④雜阿含604（大正02 p.167中）；此處如來詣波羅捺国時、阿時婆外道問仏。
- ⑥増一阿含24-05（大正02 p.618中）；便從坐起而去、欲向波羅捺国。是時優毘伽梵志遙見世尊光色炳然、翳日月明。見已白世尊曰……。
- ⑦四分律「受戒捷度」（大正22 p.787中）；見已即往詣彼仙人鹿苑所。時見優陀耶梵志、亦在路行。遙見世尊、前白仏言。瞿曇、諸根寂靜顔色怡悅。汝師是誰、為從誰学、為学何法。爾時世尊以偈報言……。
- ⑧五分律「受戒法」（大正22 p.104上）；今此五人在波羅捺国仙人鹿苑中。念已便行、未至中間道逢梵志、名優婆耆婆。遙見世尊姿容挺特諸根寂定、円光一尋猶若金山。便問曰。本事何師行何道法以致斯尊……。
- ⑩根本有部律「破僧事」（大正24 p.127上）；往詣迦施那国波羅捺斯城。乃路逢一外道、名為親

近。彼見世尊形容端嚴清淨色相善好。問曰。具壽喬答摩、諸根端正清淨顔容皮膚細滑、於何教師而得出家受誰法教。……

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.081, 南伝28 p.173) ; 十八由旬の道 (aṭṭhārasayojanamagga) を旅して、途中で優波迦 (ウパカ Upaka) という活命 (ājivika アージーヴィカ) [派] の苦行者に会い、彼に自分が仏と成ったことを語られ……。
- ③中本 (大正04 p.148上) ; 徑詣波羅奈国、未至中間、道逢梵志、名曰優呬。
- ⑦方広 (大正03 p.605下) ; 爾時如来作是念已、從菩提樹向迦尸国波羅奈城。……是時伽耶城傍有一外道、名阿字婆。
- ⑧LV. (Lef. p.405, 溝口 p.357) ; かの如来は、このように熟考された後に、「悟りの場」から立ち上がり、……カーシ (Kāśī) の国に到着された。この時、「悟りの場」の近くのカヤー (Gayā) 山の上 (近く) で、一人のアージーヴァカ (ājivaka) がこうして歩いて来られる如来を遠くから認めた。
- ⑩仏讚 (大正04 p.028下) ; 道逢一梵志 其名憂波迦
- ⑫BC. (15-01) ; なすべきことをすべて成就して、静寂にして光輝にみちた彼 (ブツダ) はただひとり行くにもかかわらず、あたかも衆人と共なるかのごとくであった。道で、ある敬虔な比丘が [ブツダを] 見て、奇異の念をいだき、合掌してこう話しかけた。
- ⑬行經 (大正04 p.087下) ; 行詣大城 波羅奈界 …… 有一達士 名曰尼捷 於路逢之
- ⑭過去 (大正03 p.643下) ; 路逢外道、名優波伽。
- ⑮集經 (大正03 p.808上) ; 爾時世尊從道樹下起已、安庠漸漸行到旃陀羅村(隋言嚴熾)。……至純 (之詢反) 陀私洩(他梨反) 羅聚落(隋言無角堆) 中、於其路上、見有一乞婆羅門、名優波伽摩(隋言来事)。
- ⑯MV. (vol. III p.325 Jones III p.316) ; (ウルヴィルヴァー [Uruvilvā] →ガヤー [Gayā] →アパラガヤー [Aparagayā] →ヴァシャーラー [Vasālā] →チュンダドゥヴィーラ [Cundadvila] と移動) アージーヴァカのウパカ (Upaka ājivaka) は路の途中で世尊を見た。
- ⑰衆許 (大正03 p.953中) ; 於是世尊自菩提樹、往波羅奈国鹿野之苑。時於路次有一仙人、名烏波識。

[C] 後世の仏伝資料

- ③氏譜 (大正50 p.092中) ; 經云。……路逢外道名優波伽。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.115, 赤沼 p.150) ; そこで阿闍波羅尼拘律陀樹の地を離れて、婆羅那斯に赴き給うた。……迦耶村 (Gaya) への途中……異教の沙門優波迦 (Upaka) に会い給うた。

【27-01】初転法輪——五比丘と会う

バーラーナシー (Bārāṇasī) の仙人墮処 (Isipatana) ・鹿野苑 (Migadāya) についた世尊を、5人の比丘は約束に反していそいそと出迎える。

[A] 原始聖典

- ①MN.026 'Ariyapariyesana-s.' (vol. I p.171) ; 私は次第に遊行して、バーラーナシーの鹿野苑の5人の比丘たちのところに近づいた……。
- ① 'Suttanipāta' Vs.684 (p.133) ; (菩薩は) 仙人墮処という園林で法輪を転じられるであろう

(vattessati cakkam Isipatane vane)。

- ① ‘Buddhavaṃsa’ 26 – 17 (p.098) ; バーラーナシーの仙人墮処において法輪を転じた (Bārāṇasī Isipatane cakkam pavattitaṃ mayā)。
- ① Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.008) ; 世尊は次第に遊行して、バーラーナシーの仙人墮処・鹿野苑 (Bārāṇasī Isipatana Migadāya) の五比丘の所に近づかれた。
- ③ 中阿含204「羅摩經」(大正01 p.777下) ; 時五比丘遙見我来、各相約勅而立制曰。諸賢、当知、此沙門瞿曇来、多欲多求……。
- ⑥ 増一阿含24-05 (大正02 p.618下) ; 是時五比丘遙見世尊来。見已、各共論議。此是沙門瞿曇從遠而来。情性錯乱、心不專精。我等勿復共語、亦莫起迎、亦莫請坐……。
- ⑦ 四分律「受戒毘度」(大正22 p.787下) ; 時世尊捨去、往仙人鹿苑所。五比丘遙見世尊来、各相誡勅言。此瞿曇沙門、行不著路迷荒失志、若来至此。汝等莫與言語、亦莫禮敬、更別施小座令坐……。
- ⑧ 五分律「受戒法」(大正22 p.104中) ; 於是世尊之波羅捺趣五人所。五人遙見仏来共作要言。瞿曇沙門昔日食一麻一米、尚不得道。今既多欲去道遠矣。但為敷一小座慎莫起迎禮拜問訊……。
- ⑩ 根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」(大正23 p.717上) ; 受梵王請往婆羅痾斯。三轉十二行法輪、度五苾芻及以隨五苾芻已。
- ⑩ 根本有部律「破僧事」(大正24 p.127上) ; 詣迦施那国波羅痾斯城仙人墮処施鹿林中。是時五人在彼林中、遙見世尊、各相謂言、共立一制。……
- ⑩ 根本有部律「破僧事」(大正24 p.156下) ; 往詣波羅痾斯城度橋陳如五苾芻衆。次度耶舍五人。次度賢衆六十人民。
- ⑩ 根本有部律「雜事」(大正24 p.292下) ; 時五苾芻於如来処、頻喚名字及以氏族、或云具寿。仏告諸苾芻。汝等不応於如来処喚其名字及以氏族或云具寿。
- ⑫ 法顯訳「大般涅槃經」(大正01 p.199下) ; 常在人天受樂果報無有窮尽。何等為四。一者如来為菩薩時、在迦比羅旃兜国藍毘尼園所生之處。二者於摩竭提国、我初坐於菩提樹下得成阿耨多羅三藐三菩提処。三者波羅捺国鹿野苑中仙人所住轉法輪処。四者鳩尸那国力士生地熙連河側娑羅林中双樹之間般涅槃処。
- ⑫ 法顯訳「大般涅槃經」(大正01 p.204中) ; 我於道場成阿耨多羅三藐三菩提、最初說法、度阿若橋陳如等五人。
- * ① DN.014 ‘Mahāpadāna-s.’ (大本經 vol. II p.040) ; ヱィパツシン仏は鹿野苑において初轉法輪された。
- * ⑦ 四分律「衣毘度」(大正22 p.849中) ; 爾時世尊、在波羅捺国鹿野苑中。時五比丘往世尊所、頭面禮足却住一面。五人白仏。我等当持何等衣。仏言。聽持糞掃衣及十種衣……。
- * ⑦ 四分律「房舍毘度」(大正22 p.936中) ; 爾時世尊在波羅捺。時五人從坐起、偏露右肩右膝著地合掌白言。世尊。我等当住何等房舍臥具。仏言。聽在阿蘭若処樹下。若空房若山谷窟中、若露地若草若草積邊、若林間若塚間若水邊、若敷草若葉……。
- * ⑦ 四分律「雜毘度」(大正22 p.945上) ; 爾時世尊在波羅捺。五比丘来至仏所、頭面禮足却坐一面。白仏言。我等應持何等。仏言。聽持迦羅鉢舍羅鉢。時有比丘入僧中食無鉢。仏言聽比坐與……。
- * ⑧ 五分律「食法」(大正22 p.147下) ; 仏在波羅捺国。爾時五比丘、到仏所頭面禮足。白仏言。世尊。我等當於何食。仏言。聽汝等乞食。復白仏言。当用何器。仏言聽用鉢……。
- * ⑨ 十誦律「臥具法」(大正23 p.243上) ; 仏在波羅捺国。爾時五比丘白言。世尊。我等当何処住。仏言。汝等応山巖竹林樹下住。諸比丘於山巖竹林樹下宿……。
- * ⑩ 根本有部律「衆多学法」(大正23 p.901中) ; 仏在婆羅痾斯仙人墮処施鹿林中。時五苾芻雖復出家尚同俗服、威儀容飾甚不端嚴。爾時世尊作如是念。過去諸仏云何教声聞衆著衣服耶。是時諸天前白仏

言。如淨居天所著衣服。世尊即以天眼觀知如諸天所說事無差異。即告苾芻曰。汝從今後応同淨居天門整着泥婆珊。

- *⑫法天訳「毘婆尸佛經」（大正01 p.156下）；時毘婆尸佛既成道已、即作是念。我於何処先應說法利益有情。諦觀思惟、滿度摩王所都大城、人民熾盛機緣純熟。作是念已、即從座起整衣服手執應器次第行乞、往滿度摩城、詣安樂鹿野園中……。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.081, 南伝28 p.172) ; 「阿沙陀 (アーサールハ) 月の満月の日に (Āsāḥipuṇṇamāsiyaṃ) 波羅奈 (Bārāṇasī バーラーナシー) へ行こう」と、十四日の朝早く夜の明け方に (cātuddasiyaṃ paccūsasamaye pabhātāya rattiya kālāssa' eva) (途中ウパカ [Upaka] に会い) その日の夕方、イシパタナ (Isipatana) に著き給うた。五群の長老たちは、……礼拝致すまい。……「友よ」と呼びかけたり……してはならない。……仏は……五群の長老たちを呼んで、転法輪經 (Dhammacakkappavattanasutta) を説き給うた。
- ③中本 (大正04 p.148上) ; 於時如来、便詣波羅奈国古仙人処鹿園樹下、趣彼五人 (拘隣、頽陞、拔提、十力迦葉、摩南拘利) 。
- ④瑞応 (大正03 p.480下) ; 仏已可梵天念誰可先度者。昔者父王遣五人侍我、今在山中、即復道還。五人見仏、自相謂言、是人來者、慎莫與起也。仏到、五人皆起、不覺作禮。……五人不對、願為弟子、仏即手摩其頭、以為沙門。
- ⑤異出 (大正03 p.620中) ; 意欲教之、当先教誰。吾王遣五人侍我、……仏即復故道而還。五人遙見仏來、不知何人、自相謂、是人來者、慎無作禮。……仏將五人俱去、行數日、仏以手摩五人頭鬚、皆為沙門。
- ⑥普曜 (大正03 p.529上) ; 從次前行至波羅奈神仙鹿苑、詣五人所。於時五人遙見仏來、転相謂言、……假使來者慎莫為起亦勿迎逆。……於時五人稽首仏足悔過自責。
- ⑦方広 (大正03 p.606上) ; 時阿字婆辭仏南行如來北逝經伽耶城。……龍名曰善見、明日設齋……盧醯多婆蘇都村、……多羅聚落……經娑羅村、……恒河辺。(船人との問答) ……如來至波羅奈、……詣鹿野苑中。時五跋陀羅遙見世尊。
- ⑨僧伽 (大正04 p.137下) ; 是時五人逢見如來、見已便相告言。……広説如契經。
- ⑩十二 (大正04 p.147上) ; 二年於鹿野園中為阿若拘隣等說法。復為畢婆般等說法。復為迦者羅等十七人說法。復為大才長者及二才念優婆夷說法。復為正念尼 說法。復為提和竭羅仏時四十二人說法。
- ⑪仏讚 (大正04 p.028下) ; 次有五比丘 応聞初說法 …… 行詣波羅奈 古仙人住処 …… 隣如族子 次十力迦葉 三名婆澗波 四阿濕波誓 五名跋陀羅 …… 遠見如來至 集坐共議言
- ⑫BC. (15-16) ; そのとき、カウディニャ族の者、マハーナーマン、ヴァーシュパ、アシュヴァジト、およびバドラジトの五人の比丘は、遠くから彼(ブツダ)を見て、お互いに次のような言葉語り合った。
- ⑬行經 (大正04 p.088上) ; 至波羅奈 …… 鹿野之園 …… 億宝意好 辺方第三 第四馬氏 第五賢居 爾時五人 遙見仏來 還共論議 而相謂言 …… 不足起迎 亦莫禮待
- ⑭過去 (大正03 p.644上) ; 爾時世尊、即復前行、往婆羅奈国、至橋陳如摩訶那摩跋波阿捨婆閣跋陀羅閣所止住処。時彼五人、遙見仏來、共相謂言。
- ⑮集經 (大正03 p.808下) ; 爾時世尊、安庠漸行、從周蘭那娑陀羅去(即是無角堆)至迦蘭那富羅聚落(隋言耳城)。……至娑羅洩聚落(隋言調御城)、……至盧醯多柯蘇兜聚落(隋言閉塞城)、從閉塞城至恒河岸。(船師と問答) 時從西門、入波羅奈城、……從城東門、……向鹿苑林。……爾時五仙、……唯橋陳如、独一人心、不同此誓。……箕宿月初十五日內、十二日晷過半人影、当如是時、…

…合於鬼宿及房宿時。

- ⑯MV. (vol. III p.328 Jones III p.320) ; リシパタナ (R̥ṣipatana) には五人のグループが滞在していた。即ち、Ājñāta Kauṇḍinya, Aśvakin, Bhadraka, Vāṣpa, Mahānāmanである。
- ⑰MV. (vol. III p.340 Jones III p.335) ; アシャーダ月の第二の二週間の十二日、日影が人の長さの半分で、アヌラーダ星座が昇るとき (aṣāḍhamāsasya uttarapakṣe dvādaśīyaṃ ... dhyar-dhapauruṣāyaṃ chāyāyāṃ anurādhe nakṣatre vijaye muhūrte) 、その瞬間に法輪を転じた。
- ⑱衆許 (大正03 p.953下) ; 爾時世尊即自往彼波羅奈国鹿野之苑。時彼五人其名灑替梨迦摩斛梨迦未斛羅囉鉢鉢囉賀拏尾婆囉多等、……遙見世尊。……時彼五人常行乞食。世尊到已、或三人乞食二人奉事、或二人乞食三人奉事、互為給侍精進無懈。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦 (大正50 p.039上) ; 爾時世尊、即復前往波羅捺国、至橋陳如摩訶那摩跋波 阿捨婆闍 跋陀羅闍 所止住处……。 (出因果經)
- ③氏譜 (大正50 p.092中) ; 經云、即復往波羅奈五人所。
- ④統紀 (大正49 p.153下) ; 三月八日、世尊前行至波羅奈国鹿野園中……仏自二月八日成道、自九日至二十九日。為寂場三七滿、至三月六日、為水辺定。四七日滿、三月七日、受提謂長者食。然後至鹿野園、正五七日內、三月八日也。涅槃云。初生出家成道轉法輪、皆以八日。
- ⑤JM. (p.029, 畑中 p.118) ; そしてアースール八月の満月の日 (Āsāḥapūṇṇamiyaṃ kālass' e-va) 、早朝に衣鉢を持って18由旬の道 (aṭṭhārasayojanamaggam) を行道し、その日のうちの夕暮れ時に (taṃ divasaṃ yeva sāyaṇhasamaye) 、イシパタナ (Isipatana) に至った。彼は五群の長老たちに法輪を転ずる談話をもって呼びかけた。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.117, 赤沼 p.155) ; 仏陀は優波迦にわかれ、歩を進めて、婆羅那斯の方へ赴き……鹿野苑に入って、不信の五比丘の住居の方へ進み給うた。…五人の最初の比丘は、橋陳如 (Kautagnya) 、跋提迦 (Baddiha) 、婆沙波 (Wappa) 、摩訶那摩 (Mahanan) 、阿説示 (Asadzi) である。

【27-02】初転法輪——中道を説く

釈尊は5人の比丘たちに苦行と樂行に近づいてはならないと、中道 (八正道) を説く。

[A] 原始聖典

- ①SN.56-11 (vol. V p.420) ; 世尊は五比丘 (pañcavaggiye bhikkhū) に語られた。出家者はこれらの二つの極端に親しんではならない (dve me bhikkhave antā pabbajitena na sevittabbā) 。
- ①Vinaya 'Mahākhanda' (vol. I p.010) ; 世尊は五比丘に告げられた。比丘らよ、二つの極端 (dve' me antā) があって、出家者は近づいてはならない。二つとは何か。愛欲において貪着すること (kāmesu kāmasukhallikānuyogo) 、自らを苦しめること (attakilamathānuyogo) である。如来はこの二つの極端を捨てて中道 (majjhimā paṭipadā) を覚った。
- ③中阿含204「羅摩經」 (大正01 p.777下) ; 五比丘当知、有二辺行、諸為道者所不当学。一曰著欲樂下賤業凡人所行、二曰自煩自苦非賢聖求法無義相応。五比丘、捨此二辺有取中道、成明成智成就於定而得自在。
- ⑦四分律「受戒捷度」 (大正22 p.788上) ; 比丘出家者、不得親近二辺。樂習愛欲、或自苦行、非賢聖法、勞疲形神不能有所辦。比丘除此二辺已、更有中道、眼明智明永寂休息、成神通得等覺、成沙門涅槃行。云何名中道……。

- ⑧五分律「受戒法」（大正22 p.104中）；仏復告曰。世有二辺不応親近。一者貪著愛欲説欲無過。二者邪見苦形無有道迹。捨此二辺便得中道、生眼智明覚向於泥洹……。
- ⑩根本有部律「破僧事」（大正24 p.127中）；爾時世尊告五人曰、出家之人不得親近二種邪師。云何為二、一者樂著凡夫下劣俗法及耽樂婬欲處。二者自苦己身造諸過失、並非聖者所行之法。
- ⑫安世高訳「轉法輪經」（大正02 p.503中）；一時仏在波羅捺国鹿野樹下坐。……於是仏告諸比丘。世間有二事墮辺行。行道弟子捨家者、終身不当與從事。何等二……。

[B] 仏伝經典

- ③中本（大正04 p.148中）；仏告五人、世有二事。…… 何謂為二、殺生婬泆、恃豪貪欲、極身勞苦、内無道跡。無是二事、是真道人不。…… 何謂取中。…… 具八正行、是名取中、止宿泥洹。
- ⑦方広（大正03 p.607中）；如来……至後夜已喚五跋陀羅而告之言、……出家之人有二種障。何等為二、一者心着欲境而不能離、……二者……自苦其身而求出離。……汝等当捨如是二辺。我今為汝説於中道、……如是八法名為中道。
- ⑧LV. (Lef. p.416, 溝口 p.367) ; 夜の最後の区分(後夜)において(rātryāḥ paścime yame)、如来はかの良い家柄出身の五人を呼んで、こう言われた。これら二つの極端は、出家修行者にとって、入ってはならない所である。……これら二つの極端を離れて進んだ後に、如来が法を教えられるのは、真ん中の道をもってである。つまり、例えば完全な視力(正見)……完全な瞑想(正定)である。
- ⑨僧伽（大正04 p.123中）；布現八賢聖道而轉法輪。彼喩如影不在日前在闇前。此亦如是、一切結使不與道共相応、是故而轉法輪。
- ⑩仏讚（大正04 p.029下）；如来即為彼 略説其要道 愚夫習苦行 樂行悅諸根 見彼二差別 斯則為大過 非是正真道 …… 我已離二辺 心存於中道 …… 八道坦平正
- ⑫BC. (15-27) ; 愚かな人は自らを困憊させたり、あるいはまた感官の対象に執着したりする。不死に到達する道ではない、誤りにみちたこの二つの極端〔な方法〕をよく見なさい。……この二つの極端な道とともに棄てさり、私は中なるもう一つの道によってさとった。……八正道……。
- ⑬行經（大正04 p.079上）；何由致道 願示其意 猶如有人 撒压沙水 唐勞其力 終不得蘇 譬人殺牛 捨乳殺角 以其行憊 終不得乳 …… 猶如盛火 得風吹動 燒然乾薪 終不休滅
- ⑭過去（大正03 p.644中）；爾時世尊、語橋陳如言。……是以苦樂、兩非道因。……今者若能棄捨苦樂、行於中道、心則寂定、堪能修彼八正聖道、離於生老病死之患。我已隨順中道之行、得成阿耨多羅三藐三菩提。
- ⑮集經（大正03 p.811上）；世尊……告諸五比丘言。……出家之人、恒常須捨世間二事。何等為二。一受欲樂。……第二捨者、自身所困、受苦之處、非聖所歎。……我如是捨彼二辺已、説有中路。……八正聖道、……是中路。
- ⑯MV. (vol. III p.331 Jones III p.323) ; 世尊は五人の比丘達に説かれた。「宗教的生活を進める人にとって、この両極端がある。二つとは何か。感覚的快樂への耽溺……自身の苦行への耽溺がある。……これらの両極端を避け、如来の聖なる法と規律によるのは中道である。
- ⑰衆許（大正03 p.954上）；仏因制之曰。有二事法、修行之人而不得行。云何二事、為於色欲生貪、……若……修其苦行、……離於苦樂行於中道。……於此八正而広修習、……趣無上正等正覚。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.039中）；爾時世尊語橋陳如言。（出因果經）

【27-03】初轉法輪——四諦三轉十二行相を説く

釈尊は中道に続いて四諦を三轉十二行相の形で説く。

[A] 原始聖典

- ①SN.56-11 (vol.V p.421) ;比丘らよ、これが苦の聖諦である。……
- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.010) ;また比丘らよ、これが苦聖諦である……。
- ③中阿含204「羅摩經」(大正01 p.778中) ;彼如是定心清淨無穢無煩、柔軟善住得不動心、修学漏尽智通作證、彼知此苦如真……。
- ④雜阿含379(大正02 p.103下) ;一時仏住波羅捺鹿野苑中仙人住处。爾時世尊告五比丘。此苦聖諦、本所未曾聞法。当正思惟時、生眼智明覺……。
- ④雜阿含604(大正02 p.167中) ;此处仙人園鹿野苑。如来於中為五比丘三轉十二行法輪。而説偈言。
此处鹿野苑 如来轉法輪 三轉十二行 五人得道跡
時王於是處興種種供養及立塔廟。
- ⑥增一阿含24-05(大正02 p.619上) ;是時世尊告五比丘。汝等当知、有此四諦。云何為四。苦諦、苦習諦、苦尽諦、苦出要諦……。
- ⑦四分律「受戒毘度」(大正22 p.788上) ;四聖諦。何謂為聖諦。苦聖諦、苦集聖諦、苦尽聖諦、苦出要聖諦。何等為苦聖諦……。
- ⑧五分律「受戒法」(大正22 p.104中) ;復有四聖諦。苦聖諦苦集聖諦苦滅聖諦苦滅道聖諦。何謂苦聖諦……。
- ⑨十誦律「五百比丘結集三藏品」(大正23 p.448中) ;一時仏在波羅捺仙人住处鹿林中……是時仏告五比丘、是苦聖諦、我先不從他聞法、中正憶念時、於諸法中、生眼生智生明生覺……。
- ⑩根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」(大正23 p.717上) ;受梵王請王婆羅痾斯、三轉十二行法輪、度五苾芻及以隨五苾芻已。
- ⑩根本有部律「苾芻尼波羅市迦001」(大正23 p.911上) ;往婆羅痾斯国仙人墮處施鹿林中、為五苾芻及以隨五、三轉十二行法輪。
- ⑩根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」(大正23 p.948中) ;受梵王請往婆羅痾斯、三轉十二行法輪度五苾芻及以隨五苾芻已。
- ⑩根本有部律「出家事」(大正23 p.1027上) ;時有梵天、來請世尊。於波羅痾斯、三轉法輪。時會聽者、有大臣子五十余人。既聞法已、並請出家及受近円。
- ⑩根本有部律「破僧事」(大正24 p.127下) ;爾時世尊告五人曰。此苦聖諦法、我未曾聞、由如理作意精勤力故、得淨慧眼智明覺生。……
- ⑩根本有部律「雜事」(大正24 p.292上) ;如是我聞。一時薄伽梵在婆羅痾斯仙人墮處施鹿林中。爾時世尊告五苾芻曰。汝等苾芻、此苦聖諦於所聞法、如理作意、能生眼智明覺……。
- ⑩根本有部律「雜事」(大正24 p.299下) ;受梵天請往婆羅痾斯三轉十二行法輪。
- ⑩根本有部律「雜事」(大正24 p.399下) ;至婆羅痾斯国為五苾芻、三轉十二行四諦法輪。
- ⑩根本有部律「雜事」(大正24 p.406下) ;一時薄伽梵在婆羅痾斯仙人墮處施鹿林中。爾時世尊告五苾芻曰。此苦聖諦於所聞法如理作意、能生眼智明覺。此中広説如上三轉法輪經。
- ⑫法顯訳「大般涅槃經」(大正01 p.204上) ;於菩提樹下思八聖道究竟源底、成阿耨多羅三藐三菩提、得一切種智。即往波羅捺国鹿野苑中仙人住处、為阿若憍陳如等五人轉四諦法輪、其得道跡。爾時始有沙門之稱出於世間福利衆生。
- ⑫安世高訳「轉法輪經」(大正02 p.503中) ;若諸比丘本未聞道、当已知甚苦為真諦……。
- ⑫義淨訳「三轉法輪經」(大正02 p.504上) ;一時薄伽梵在婆羅痾斯仙人墮處施鹿林中。爾時世

尊告五苾芻曰、汝等苾芻、此苦聖諦……。

*④雑阿含380～402（大正02 p.104中）；「一時仏住波羅捺仙人住处鹿野苑中」としてさまざまな形で四諦説が説かれている。初転法輪をイメージしたものと考えられる。

[B] 仏伝経典

- ③中本（大正04 p.148中）；若能断貪、精進修明、可得泥洹。何謂泥洹。先知四諦。何謂為四、……何謂為苦、……何謂為習、……何謂為尽、……何謂入道。
- ⑦方広（大正03 p.607中）；有四聖諦。何等為四、所謂苦諦、苦集諦、苦滅諦、證苦滅道諦。
- ⑧LV. (Lef. p.417, 溝口 p.367)；ここに四つの尊敬すべき真理がある。その四つとは何々であるか？それらは、苦しみ（苦）、苦しみの起源（集）、苦しみの妨げ（滅）、苦しみの妨げに導く道（道）である。
- ⑨僧伽（大正04 p.124下）；以四賢聖諦觀察四方分別決了。以無漏等見山踞生死岸、已踞彼生死岸。至善業等業等方便娛樂三昧、八賢聖道皆悉分別。
- ⑩仏讚（大正04 p.030中）；我知苦断集 證滅修正道 觀此四真諦 遂成等正覺
- ⑫BC. (15-38)；これはすべて苦である。これは〔苦の〕原因である。……これはその〔滅に至る〕道である。このように、解脱のための、先例のない、いまだ聞いたこともない真理の道について、私の目が開いたのである。
- ⑬行經（大正04 p.079中）；以是四諦 為是五人 三明解脱 以堅金剛 正法慧杵 壞碎五人 塵勞之山
- ⑭過去（大正03 p.644中）；爾時世尊、觀五人根堪任受道、而語之言。……憍陳如、我以知苦、以断習、以證滅、以修道故、得阿耨多羅三藐三菩提。……当知……若人不知四聖諦者。
- ⑮集經（大正03 p.811中）；爾時仏告諸比丘言。汝等比丘、至心諦聽。有四聖諦、何等為四、謂苦聖諦、苦集聖諦、苦滅聖諦、得道聖諦。……
- ⑯MV. (vol. III p.331 Jones III p.324)；さて比丘達よ、ここに四つ聖なる真理がある。四とは何か。
- ⑰衆許（大正03 p.954上）；爾時世尊……觀知五人堪能受法、即復告曰……是苦汝須知、……此是集汝應断、……此是滅汝應證、……此是道汝應修。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.039中）；爾時世尊觀五人根、堪任受道。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.092中）；……仏具為解脱、五陰輪廻三有諸苦。陳如最初悟解四諦……。
- ④統紀（大正49 p.153下）；初為憍陳如説四聖諦法、汝今应当知苦断集証滅修道。当仏三転四諦十二行法輪。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.118, 赤沼 p.156)；私は今阿羅漢となった。世の中に、四真諦の理を知るものは私のみである。

【27-04】初転法輪——コンダンニャに法眼生ず

四諦の三転十二行相を聞いた5比丘の一人のコンダンニャ (Koṇḍañña) に法眼が生じる（預流果を得る）。これによってコンダンニャはアンニャータコンダンニャ (Aññātakoṇḍañña) と呼ばれるようになる。

[A] 原始聖典

- ①SN.56-11 (vol. V p.423) ; この教えを説かれたとき、具寿コンダンニャに遠塵離苦の法眼が生じた (āyasmato Koṇḍaññaṃ virajaṃ vitamaṃ dhammacakkhum udapādi) 。
- ① ‘Theragāthā’ Vs.679 (p.069) ; 激しく精進する長老Koṇḍaññaはブツダに次いで正覚し、生死を捨てて梵行を完成した (buddhānubuddho yo thero Koṇḍañño tibbanikkhāmo, pahīnājātim araṇo brahmacariyassa kevali) 。
- ① ‘Theragāthā’ Vs.1246 (p.111) ; 激しく精進する長老Koṇḍaññaはブツダに次いで正覚し、常に安楽住と遠離を得ている (lābhī sukhavihārānaṃ vivekānaṃ abhiṇhaso) 。
- ① ‘Apadāna’ 03-01-007 (p.049) ; (出家してから) 7年目に仏は真実を説かれ、その名をKoṇḍaññaと称する者は、最初に覚る (tato sattamaṃ vasse Buddhō saccaṃ kathessati Koṇḍañño nāma nāmena paṭhamaṃ sacchikāhi) 。
- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.011) ; この教えを説かれたとき、Koṇḍaññaに遠塵離苦の法眼 (viraja vitamala dhammacakkhu) が生じた。生じたものはすべて滅するものである (yaṃ kiñci samudayadhammaṃ sabbaṃ taṃ nirodhadhammaṃ) と。
- ④雑阿含379 (大正02 p.104上) ; 爾時世尊説是法時、尊者憍陳如及八萬諸天、遠塵離垢得法眼淨。
- ⑥増一阿含24-05 (大正02 p.619中) ; 爾時説此法時、阿若拘隣諸塵垢尽、得法眼淨。
- ⑦四分律「受戒捷度」 (大正22 p.788中) ; 爾時世尊説此法。時五比丘阿若憍陳如、諸塵垢尽得法眼生。
- ⑧五分律「受戒法」 (大正22 p.104下) ; 説是法時。地為六返震動。憍陳如遠塵離垢、於諸法中得法眼淨。
- ⑨十誦律「五百比丘結集三藏品」 (大正23 p.448下) ; 説是法時、長老憍陳如及八萬諸天、遠塵離垢諸法中法眼生。
- ⑩根本有部律「僧伽伐尸沙002」 (大正23 p.682中) ; 至余房而告之曰。此是上座阿若憍陳如所住之房。諸妹、然此世間盲冥無識、既罕將導長夜輪迴。爾時世尊初成正覺以妙智藥為開法眼、三轉法輪令其啓悟。於大師衆弟子之中最為上首。耆年宿德善修梵行、受持法衣此為初首。汝應至心禮敬其足。
- ⑩根本有部律「破僧事」 (大正24 p.128上) ; 世尊説此法時、具寿憍陳如、證於無垢無塵法中得法眼淨。及八萬天衆、於法中亦證法眼。
- ⑩根本有部律「雜事」 (大正24 p.292中) ; 爾時世尊説是法時。具寿憍陳如及八萬諸天遠塵離垢得法眼淨。
- ⑫安世高訳「転法輪經」 (大正02 p.503下) ; 仏説是時、賢者阿若拘隣等及八千天、皆遠塵離垢諸法眼生。
- ⑫義浄訳「三転法輪經」 (大正02 p.504上) ; 爾時世尊説是法時、具寿憍陳如及八萬諸天、遠塵離垢得法眼淨。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.082, 南伝28 p.174) ; 五群中の阿若憍陳如 (アンニャーコンダンニャ Aññākoṇḍañña) 長老は、その説法を聞いて智慧を獲、〔仏が〕この經の説を終え給うと、……預流果に入った。
- ③中本 (大正04 p.148下) ; 説是法已、拘隣等五人、速得法眼。
- ⑥普曜 (大正03 p.530中) ; 拘隣知之。拘隣者知本際也。
- ⑧LV. (Lef. p.421, 溝口 p.371) ; こうして十二の面を持つ法の車輪は立派に廻された。それはカウディンヤによってよく認識された。カウディンヤ (Kaundinya) を五人の修行者の中の第一人者として、法の眼が六十億の神々の所で立派に清められた。

- ⑪ 仏讚（大正04 p.030中）；說是真実時 橋憐族姓子 八萬諸天衆 …… 清淨法眼成 ……
於仏弟子中 最先第一悟
- ⑫ BC. (15-51)；このようにここ（鹿の園）で慈しみの心にみちた偉大な仙人がこの教えをお説きになったとき、カウンディニャ氏族の者と百の神々とは……塵を離れた〔真理を見る〕眼（法眼）を得た。
- ⑬ 過去（大正03 p.644下）；橋陳如、汝等解未。橋陳如言、解已世尊、知已世尊。以於四諦得解知故、故名阿若橋陳如。当仏三轉四諦十二行法輪時、阿若橋陳如、於諸法中、遠塵離垢、得法眼淨。
- ⑭ 集經（大正03 p.811下）；仏説如是法相之時、……彼橋陳如、即於坐処、諸垢皆除、煩惱尽滅、得法眼淨、如実而知。
- ⑮ MV. (vol. III p.333 Jones III p.327)；この説法によつて、尊者アージュニャータカウンディニャ (Ājñātakauṇḍinya) は損なわれることのない、汚れのない法眼淨を得た。
- ⑯ 衆許（大正03 p.954中）；爾時世尊如是三轉十二行法輪。時尊者鈎掘等、除去塵垢得法眼淨。

[C] 後世の仏伝資料

- ① 釈迦（大正50 p.039下）；橋陳如、汝等解未。（出因果經）
- ② 氏譜（大正50 p.092中）；經云。……陳如最初悟解四諦得法眼生。
- ③ 統紀（大正49 p.154上）；時橋陳如得法眼淨。
- ④ JM. (p.029, 畑中 p.119)；「転法輪經」が終わったとき、アンニャータ・コンダンニャ (Añ-ñāta-Koṇḍañña) が18俱底の諸梵天とともに預流果に安立した。

【27-05】初転法輪——善来比丘戒

出家を希望するアンニャータコンダンニャに釈尊は「来れ、比丘よ。法はよく説かれた、正しく苦を滅するために梵行を行ぜよ」（善来比丘戒）と許される。これが彼の具足戒である。

[A] 原始聖典

- ① Vinaya 'Mahākhanda' (vol. I p.012)；世尊は言われた。「来れ、比丘よ。法はよく説かれた、正しく苦を滅するために梵行を行ぜよ (ehi bhikkhu, svākkhāto dhammo, cara brahmacariyaṃ sammā dukkhassa antakiriya) 」と。これが具寿（コンダンニャ）に対する具足戒であった (sā 'va tassa āyasmato upasampadā aho) 。
- ② AN.01-014 (vol. I p.023)；私の弟子の中で出家してもっとも久しい者の第1はアンニャータ・コンダンニャである。
- ③ 四分律「受戒捷度」（大正22 p.788下）；爾時尊者阿若橋陳如、見法得法成辦諸法已獲果実。前白仏言。我今欲於如来所修梵行。仏言来比丘、於我法中快自娛樂、修梵行尽苦原。時尊者橋陳如即名出家受具足戒。是謂比丘中初受具足戒、阿若橋陳如為首。
- ④ 五分律「受戒法」（大正22 p.105上）；於是橋陳如、從坐起頂禮仏足、白仏言。世尊、願與我出家受具足戒。仏言。善来比丘受具足戒。於我善説法律能尽一切苦淨修梵行。橋陳如鬚髮自墮、袈裟著身鉢盂在手。是為橋陳如已得出家受具足戒。
- ⑤ 僧祇律「雜誦跋渠」（大正22 p.412下）；仏告舍利弗。如来所度阿若橋陳如等五人善来出家善受具足。共一戒一竟一住一食一学一説。次度滿慈子等三十人。次度波羅奈城善勝子。次度優樓頻螺迦葉五百人。次度那提迦葉三百人。次度伽耶迦葉二百人。次度優波斯那等二百五十人。次度汝大目連各二百五十人。次度摩訶迦葉闍陀迦留陀夷優波離次度釈種子五百人。次度跋度帝五百人。

次度群賊五百人。次度長者子善来。如是等如来所度善来比丘出家善受具足、共一戒一竟一住一食一学一説。舍利弗。諸比丘所可度人亦名善来出家善受具足乃至共一説。是名善来受具足。

- ①根本有部律「破僧事」（大正24 p.129下）；仏告諸長者子曰。今正是時、善来苾芻、汝便出家修諸梵行。作是語已彼長者子等鬚髮自落袈裟著身成苾芻相。如經七日曾出家者其所悟解如百歳苾芻。

[B] 仏伝經典

- ③中本（大正04 p.148中）；五人便解、願為弟子。仏言、善来比丘、皆成沙門。
- ⑦方広（大正03 p.606下）；五跋陀羅俱白仏言、世尊我今願得於仏法中而為沙門。仏言、善来比丘、鬚髮自落法服着身便成沙門。
- ①①仏讃（大正04 p.031上）；即命比丘来 応声俗容廢 具足出家儀 皆成於沙門
- ①②BC. (16-15)；それから如来は彼（ヤシャス）に向かつて、「比丘よ、来たれ」とおっしゃった。彼は比丘のしるし（出家の姿）をとったが、その瞬間に解脱した。
- ①④過去（大正03 p.645上）；時彼五人、……而白仏言。世尊我等五人……我等今者欲於仏法出家修道、唯願世尊、慈愍聽許。於時世尊、喚彼五人、善来比丘。鬚髮自落、袈裟着身、即成沙門。
- ①⑤集経（大正03 p.812下）；時橋陳如……而白仏言。善哉世尊、我入仏法、世尊度我、以為沙門。與具足戒、願作比丘。爾時仏告橋陳如言。善来比丘、入我法中、行於梵行。……是時長老橋陳如、身即便出家、成具足戒。
- ①⑦衆許（大正03 p.954中）；於是五人既悟道已、乃白仏言。我等欲於仏法出家、願賜聽許。爾時如来謂五人曰、善来苾芻。於是五人鬚髮自落、袈裟着身成沙門形。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.040上）；於時世尊、喚彼五人善来比丘……。（出因果経）
- ③氏譜（大正50 p.092下）；経云。時彼五人、既見道跡欲求出家。世尊喚言善来比丘、鬚髮自墮即成沙門。
- ④統紀（大正49 p.154上）；時五人白仏、欲求出家。世尊呼彼五人、善来比丘。須髮自落、袈裟著身、即成沙門。
- ⑤JM. (p.030, 畑中 p.120)；「来たれ、比丘」の出家方法によって出家せしめ……。

【27-06】初転法輪——他の4人に法眼生ず

続いてヴァッパ（Vappa）、バディヤ（Bhaddiya）、マハーナーマ（Mahānāma）、アッサジ（Assaji）の4人に法眼が生じる。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘Mahākhanda’ (vol. I p.012)；時にVappaとBhaddiyaに法眼が生じた。時に世尊はもたらされた食を食して、余の比丘らに説法し、3人の比丘らが乞食してもたらされたものによって、これら6人は生活した (yam tayo bhikkhū piṇḍāya caritvā āharanti, tena chabbago yāpeti)。時にMahānāmaとAssajiに法眼が生じた。
- ⑦四分律「受戒捷度」（大正22 p.788下）；爾時世尊、與尊者阿濕卑摩訶摩男比丘説法……即於座上諸塵垢尽得法眼淨。……時世尊與婆提婆敷二人説法……即於座上諸塵垢尽得法眼淨。
- ⑧五分律「受戒法」（大正22 p.105上）；仏便為四人説法教誡。跋提婆頗二人得法眼淨、見法得果、見法得果已。從坐起頂禮仏足、白仏言。世尊、願與我出家受具足戒。仏言。善来比丘。乃至

鉢盂在手、亦如上説。復為二人説法教誡。頹鞞摩訶納得法眼淨、見法得果。見法得果已、從坐起頂禮仏足。白仏言。世尊、願與我出家受具足戒。仏言。善來比丘。乃至鉢盂在手、亦如上説。

- ①根本有部律「破僧事」（大正24 p.128中）；世尊説此四諦法時阿若憍陳如證諸漏尽心得解脫。四人於此法中離諸塵垢證清淨眼。爾時世間中有二応供。一是世尊、二是憍陳如。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.082, 南伝28 p.174)；仏はその処で安居に入り給うた。〔翌日〕仏は婆沙波（ヴァッパ Vappa）長老を教えて、精舎の中に在し、他の四人の比丘達は托鉢に出歩いた。〔そして〕婆沙波長老は午前中に預流果に達した。斯ようにして、その翌日は跋提耶（バディヤ Bhaddiya）長老、その翌日は摩訶那摩（マハーナーマ Mahānāma）長老、又その翌日は阿説示（アッサジ Assaji）長老を、皆預流果に入らしめ、分月の五日に（pañcamyaṃ pakkhassa）、五人の比丘衆を集めて、無我相經（Anattalakkhaṇastanta）を説き給うた。
- ⑥普曜（大正03 p.530中）；拘隣之等五人比丘、六十億天得法眼淨。
- ①①仏讃（大正04 p.030下）；如来善方便 次令入正法 前後五比丘 得道調諸根
- ①②BC. (16-01)；かくて一切知者（ブツダ）はアシュヴァジトを始めとする、心に〔教えを受けられる〕用意のできた、かの比丘たちすべてを解脫への教え（法）に悟入させた。
- ①④過去（大正03 p.644下）；時彼摩訶那摩等四人、……阿若憍陳如、獨悟道跡、……世尊若更為我説法、我等亦當復悟道跡。……爾時世尊、……即便重為廣説四諦。于時四人、於諸法中、亦離塵垢、得法眼淨。
- ①⑤集經（大正03 p.812下）；余四比丘、各説法要、隨機教授。……當是之時、次一長老、跋提梨迦（隋言小賢）、其次長老名婆沙波（隋言起気）、……得法眼淨。……彼之長老摩訶那摩（隋言大名）、并及長老阿奢踰時（隋言調馬）、……得淨法眼。
- ①⑥MV. (vol. III p.337, Jones III p.330)；この法が説かれた時、他の四人の比丘も法眼淨を得た。
- ①⑦衆許（大正03 p.954中）；【27-04】を含む。

[C] 後世の仏伝資料

- ①①釈迦（大正50 p.040上）；即便重為廣説四諦。（出因果經）
- ①③氏譜（大正50 p.092下）；經云。……次為四人重説四諦、亦離塵垢得法眼淨。
- ①④統紀（大正49 p.154上）；世尊知四人心念、重為廣説四諦亦得法眼淨。
- ①⑤JM. (p.029, 畑中 p.119)；白月の最初の日には（Pāṭipadadivase）ヴァッパ（Vappa）長老に、翌日にはヴァッディヤ（Bhaddiya）の長老に、3日目には（tatiyodivase）マハーナーマン（Mahānāman）長老に、4日目には（catutthiyaṃ）アッサジ（Assaji）長老に法眼が生じた。
- ①⑥Bigandet. (vol. I p.119, 赤沼 p.158)；この氷の様な不信が解けて仏道を信ずるに至った五比丘は、豫流果に入った。

【27-07】初転法輪——無常・苦・無我を説く

釈尊が法眼を生じた5人の比丘らに、一切は無常であり、苦であり、無我であると説く。

[A] 原始聖典

- ①①SN.22-059 (vol. III p.66)；パーラーナシーの鹿野苑の因縁。世尊は五人の比丘に説かれた。色は無我である。若し色が無我ならば色は病気をしない……。五人の比丘は心解脫した（cittāni vimuccimsu）。

- ①Vinaya ‘Mahākhanda’ (vol. I p.013) ;時に世尊は五人の比丘に説かれた。「比丘らよ、色は無我である。もしこの色が我であるならば、この色は病氣となることはないであろう。色においてこうしよう、こうしないでおこうということができるであろう。しかし色は無我であるがゆえに、病氣ともなり、色においてこうしよう、こうしないでおこうということができる。…
- ④雑阿含034 (大正02 p.007下) ;一時仏住波羅捺国仙人住处鹿野苑中。爾時世尊告余五比丘、色非有我、若色有我者、於色不応病苦生……。仏説此經已、余五比丘不起諸漏、心得解脱。
- ⑦四分律「受戒度」 (大正22 p.789上) ;時世尊食後告五比丘。比丘、色無我。若色是我者、色不増益、而我受苦。若色是我者、応得自在。欲得如是色不用如是色。以色無我故、而色増長。故受諸苦。亦不能得随意欲得如是色便得、不用如是色便不得。受想行識亦復如是。云何比丘、色是常耶、色無常耶……。
- ⑧五分律「受戒法」 (大正22 p.105上) ;於意云何、色為是常為無常乎。答言無常……。
- ⑩根本有部律「破僧事」 (大正24 p.128中) ;爾時世尊復告四人曰。汝等当知、色無我。若色有我、不応生諸疾苦、能於色中、作如是色、不作如是色。是故汝等、知色無我故、生諸疾苦、不能作如是色、不作如是色。受想行識亦復如是。知。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.082, 南伝28 p.174) ; (サヴァナ月の黒) 分月の五日に (pañcamiyam pakkhassa) 五人の比丘衆を集めて、無我相經 (Anattalakkhaṇastanta) を説き給うた(1)。
- ⑦方広 (大正03 p.607下) ;語橋陳如等言、眼は無常苦空無我無人無衆生無壽命。
- ⑧LV. (Lef. p.417, 溝口 p.370) ;眼は永続的なものでもなく……。
- ⑨僧伽 (大正04 p.138下) ;是時云何復生此苦。……於苦觀空最初微妙等度彼処、……於苦觀無我。
- ⑭過去 (大正03 p.645上) ;爾時世尊、問彼五人。汝等比丘、知色受想行識為是常為無常耶。為是苦為非苦耶、為是空為非空耶、為有我為無我耶。
- ⑮集經 (大正03 p.813上) ;爾時世尊、……告五比丘言。……若知諸色は無我者、是色則不作惱壞相、当不受苦。……受想行識、亦復如是……此識無常、……此識是苦。
- ⑰衆許 (大正03 p.954中) ;爾時世尊復謂鈎掘等言。色是常是無常、是苦是非苦、是空是非空、是有我是無我、受想行識是常是無常。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦 (大正50 p.040上) ;爾時世尊問彼五人。(出因果經)
- ④統紀 (大正49 p.154上) ;仏復為説五陰無常苦空無我。

(1) 原文にはpañcamiyam pakkhassaという表現しかないが、バーラーナシーに到着したのがアースール八月の満月の日(白分15日)とするから、その第5日目はサヴァナ月の第5日と解釈した。

【27-08】初転法輪——五比丘心解脱す

無常・苦・無我の教えを聞いた5人の比丘たちが心解脱して、阿羅漢果を得る。釈尊を含めて阿羅漢は6人となる。

[A] 原始聖典

- ①MN.026 ‘Ariyapariyesana-s.’ (vol. I p.173) ; 彼ら (5人の比丘) に知見が生じた、我らの解脱は不動であり、これが最後の生であり、再びこの生に戻らない (akuppā no vimutti, ayam antimā jāti, na'tthi dāni punabbhavo) 、と。
- ①Vinaya ‘Mahākhanda’ (vol. I p.014) ; 世尊が教えを説かれたとき、五人の比丘は取著なく漏から心解脱した (anupādāya āsavehi cittāni vimuccimsu) 。その時世間に阿羅漢は6人となった (tena kho pana samayena cha loke arahanto honti) 。
- ③中阿含204「羅摩経」(大正01 p.778中) ; 如是五比丘、比丘漏尽得無漏、心解脱慧解脱、自知自觉自作證成就遊、生已尽梵行已立、所作已辦不更受有知如真。
- ⑥増一阿含24-05 (大正02 p.619中) ; 是時五比丘尽成阿羅漢。是時三千大千刹土有五阿羅漢、仏為第六。
- ⑦四分律「受戒捷度」(大正22 p.789中) ; 爾時世尊説此法時、五比丘一切有漏心解脱、得無礙解脱智生。爾時此世間有六羅漢、五弟子如来至真等正覺為六。
- ⑧五分律「受戒法」(大正22 p.105上) ; 説是法時、五比丘一切漏尽、得阿羅漢道。爾時世間有六阿羅漢。
- ⑩根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」(大正23 p.717上) ; 受梵王請王婆羅痾斯、三轉十二行法輪、度五苾芻及以隨五苾芻已。
- ⑩根本有部律「破僧事」(大正24 p.128下) ; 爾時世尊説此法時、彼四人等聞此法已、心得解脱證阿羅漢果。是時世間有六阿羅漢。仏為第一。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.082, 南伝28 p.174) ; この説法 (無我相経) が終ると、五人の長老たちは皆阿羅漢果に入った。
- ③中本 (大正04 p.149上) ; 説是法時、拘憐等五人、漏尽意解、皆得羅漢。
- ⑦方広 (大正03 p.608上) ; 爾時世尊為憍陳如、三轉十二行法輪已。憍陳如等悉了達諸法因縁、漏尽意解成阿羅漢。即於是時三宝出現、婆伽婆為仏宝、三轉十二行法輪為法宝、五跋陀羅為僧宝。
- ⑬行経 (大正04 p.079中) ; 以是四諦 為是五人 三明解脱 以堅金剛 正法慧杵 壊碎五人 塵勞之山 億宝始初 覺正諦法
- ⑭過去 (大正03 p.645上) ; 時五比丘、聞仏説是五陰法已、漏尽意解、成阿羅漢果。……於是世間、始有六阿羅漢。仏阿羅漢是為仏宝、四諦法輪是為法宝、五阿羅漢是為僧宝、如是世間三宝具足、為諸天人第一福田。
- ⑮集経 (大正03 p.813下) ; 爾時世尊、説是法已。時五比丘、於有為中、諸漏滅尽、心得解脱。当於是時、此世間有六阿羅漢。
- ⑰衆許 (大正03 p.954中) ; 爾時五苾芻聞仏説是五蘊之法、乃得漏尽證於無学。……三宝之名今已具足。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦 (大正50 p.040上) ; 漏尽意解成阿羅漢果。(出因果経)
- ③氏譜 (大正50 p.092下) ; 経云。……重説五陰解成羅漢。世間有六仏是仏宝、四諦法宝、五人僧宝、是世間三宝、具足天人第一福田。
- ④統紀 (大正49 p.154上) ; 仏復為説五陰無常苦空無我、漏尽意解成阿羅漢。
- ⑤JM. (p.030, 畑中 p.119) ; 5日目に (pañcamyaṃ) 、その全ての五群比丘は「無我相経 (Anattalakkhaṇastanta) 」が終わったとき、阿羅漢果に安立した。

- ⑥Bigandet. (vol. I p.120, 赤沼 p.158) ; 其等の五比丘の入道は同じ一つ場所に一時に六人の阿羅漢が集まり給うたという光輝ある驚くべき光景を世界に示したのである。